

---

# パンドラの希望

嘉月菜美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パンドラの希望

### 【Nコード】

N4144Q

### 【作者名】

嘉月菜美

### 【あらすじ】

普通の日常を送っていた、未来と自由。  
引越しの準備をしている最中、両親の部屋から1つの箱を見つける。  
その箱を開いた瞬間、鬼の封印を解く呪文を世に流してしまう。  
その日から2人の日常が戦場へと化す――。

## プロローグ：禁忌の箱

赦されない事をした——そう、禁忌の箱を開けてしまった。  
それが、この物語の始まり。  
そして、この世の終わりだった。

——未来

2010年、夏——。

世は太陽に照らされ、猛暑が続いていた。  
辺りからはうるさいくらいに蝉が合唱をしている。  
そんな中、みどりおか緑丘高校は今日、終業式を挙げていた。  
明日からは生徒が待ちわびていた夏休み。  
それは彼女たちの間でも話題になっていた。

「明日から休みだね」

式の最中、ポニーテールをした少女——あたちみな足立未来はそう話しかけた。  
彼女の友達であるかつしかりんこ葛飾燐子はその言葉に頷いた。

「うん、夏休み遊ぼうね」

「もちろん！」

未来は嬉しそうに笑った。

燐子は爽やかな笑顔で答えた。

彼女はこの炎天下でもベージュ色の髪を腰まで伸ばしているが、汗をかいている様子はなかった。

未来の前に立っている自由は、みゆ制服のズボンを少し折り曲げ、うちらで仰いでいた。

「式にうちわ、持ち込み禁止だよー」

後ろから未来に指摘され、自由は慌ててうちわを隠した。

自由は未来の双子の兄だが、いつもこうして妹である未来に怒られている。

「だってもう、暑くて倒れそうだもん」

「大丈夫、自由は倒れたりなんかしないから」

「何それー！」

このやり取りが先生に気付かれたのか、2人は軽く怒られてしまった。

後ろから眺めていた燐子はその様子を笑って見ていた。

式が終わると残すは通知表の結果だった。

未来は体育を苦手としているが、現国や古典を得意としている。

逆に自由は体育こそが命で、理科や社会が苦手だ。

その得意不得意はやはり通知表にも現れていた。

「やったあ、見てよ！体育5！！」

「あつそ、良かったね」

自由の喜びは未来によつて適当に流されてしまった。

未来の体育の成績は3だったようだ。

「いいじゃん、欠点じゃないんだし」

能天気な自由を未来は睨み付けた。

「もちろんでしょ！？欠点だったら泣くよ！？」

「うわ、そんな怒らなくても…」

自由は少し拗ねた様子で、鞆に通知表を片付けた。

そして燐子に話しかけた。

「燐子ちゃんは相変わらず1位だもんね」

「うん。でも、別に成績に興味はないけどね」

「それは成績がいいから言えるんだよね」

途中で未来も会話に加わってきた。

先生が散らばった生徒を席に着かせると、夏休みの諸注意をした。

先生の話が終わると、帰りの合図だ。

皆は一斉に教室を駆け足で行って行く。

未来は自由と燐子と一緒に家に向かった。

「2人はいつ引っ越すの？」

「もう新しい家は見つかったるんだよね。多分夏休み中に移動する予定かな」

「また引っ越したら招待してね」

「もちろんだよ」

未来は自由と二人暮らし。

両親は2人が幼い頃に他界してしまった。

なので2人の記憶の中にも両親との思い出は曖昧なものだった。

それからずっとその家で暮らしていたが、2人で住むには広すぎるため、この前マンションに引っ越す事にしたのだ。

「あー今から引っ越しの準備かー」

「ちゃんと働いてね」

「私、暇だから手伝おうか？」

だるそうにする自由を見てか、燐子はそう提案した。

「いいよ、家庭内の事なんだし。自由にやらせるから」

「その言い方怖いんだけど…」

しかし未来は自由に甘くはなかった。

自由はちらつと燐子を見ると小声で「ありがとう」と言った。  
その後、2人は燐子と別れ家に帰った。

夏休みに入ってまだ一週間足らず。

朝早くから慌ただしい音が聞こえる。

「自由、その荷物はそっちで言っただじゃん」

「あれ？そうだったっけ？」

「もう、しっかりしてよね」

自由はダンボールを抱えながら、挙動不審な動きをしていた。

未来は順調に荷物をダンボールに詰めていた。

彼は自分の手にある荷物を未来の座る横に置いた。

「ん、ありがと。じゃあ次は、食器を新聞紙に包んで詰めていって」  
「わかった！」

自由はバタバタと階段を下り行つた。

未来は詰め終わったダンボールにガムテープを貼る作業をしていた。

「後は…お母さんとお父さんの部屋だけだね」

よつ、と掛け声をかけて未来は立ち上がった。

そしてすぐ横の部屋に入つて行つた。

この部屋は2人が他界したあと、一切入ることはなかった。

未来は両親の荷物の中から、必要なものと不要なものの仕分けを始めた。

しかし未来が思っていたより荷物が多く仕分けに時間がかかっていったため、いつの間にか食器を詰めていた自由が部屋に入ってきた。

「…懐かしいね、この部屋」

「うん。あんまりお母さんもお父さんも記憶にないけど」

未来は作業する手を一旦止め、この部屋を見渡した。

両親との死別はあまりにも急で、そして2人が幼すぎたため実感が湧かなかった。

けれど部屋にある机に立てられた写真立てに中で笑っている家族を見ると、未来は堪えていた涙を一気に流した。

自由は突然で啞然としていたが、未来の隣に座り込むと背中をさすつた。

「…急だったもんね。なんで死んだのか、覚えてないし」

「もつと…ちゃんと、記憶に残ってたなら、良かったのに…」

未来は言葉を詰まらせながら、必死に訴えるように自由にすがり付いた。

自由は泣かなかった。

いや、泣けなかった。

いつも自分を叱ってくれる妹が、実はこんなにも我慢していたから。ここで自分も泣いてしまうと、一体誰が支えるというのか。

自由はそう心で思いながら、ぼんぼんと頭を撫でた。

「よし、この写真は持っていこう。大事な思い出だからね」

「……うん」

手で涙を拭いながら、未来は小さく頷いた。

自由は机の上から写真立てを取ると、”必要”と書かれたダンボールの中に丁寧に入れた。

未来はふと目を机の下に向けた。

すると少し凹んだ部分を彼女は見逃さなかった。

未来は机の下に向かうと、凹んだ部分をじっくり見た。

凹んだ部分の端には、小さな取っ手が付いている。

未来はそれをゆっくり引いた。

すると中から箱が出てきた。

自由はひよこつと未来の後ろから顔を出した。

「…何それ？」

「わかんない。なんだろう…」

未来はとりあえず、箱を小さな倉庫から取り出すと埃を払った。

かなり古いものらしく、おそらくは両親の遺品が入っているだろう。

未来はそう推測した。

「開けてもいいかな？」

「ちよつと、不気味だけどね」

自由はあまり乗らないようだった。

しかし好奇心旺盛は未来は、ゆっくりとその箱を開いた。

その瞬間、どす黒い光や誰かの叫び、嘆き声が部屋を支配した。

身体の中にその黒い光が浸透していくのを感じていた。

「な、何これ!？」

「まずいつ!」

自由は咄嗟にその箱を閉じようとした。

しかしすでに自由の身体は黒い光に支配され、動かずにいた。

未来はぐるぐると眩暈を起こし、箱を抱えたまま意識を手放してしまった。

自由は神経を研ぎ澄まし、その場に意識を保てたが、身体が動いたのと同時に、箱の中は空っぽになっていた。

「…未来!？」

自由は急いで未来の元へ駆け寄った。

その時、自由は身体の異変を感じた。

重い、苦しい、痛い……。

そして最後に見たのは、ゆっくり目を開けた未来の、赤色に染まった左目だった。

俺は、何をしていた？

どうしてあの時、妹に止めるよう言わなかったのだろう。

この箱が開いた瞬間、絶望の未来が見えた気がした。

——自由

## 1話：幼馴染

外は太陽が沈み、真っ暗になっていた。

未来は目を覚ました後、倒れていた自由の介抱をしていた。

彼女は台所に立って、夕食作りを始めた。

しかし異状なしでは無かった。

目に異常な痛みを感じたため、彼女は先ほど鏡で確認をしていた。

自分の顔を自分で見た時、彼女は驚きのあまり声が出なかった。

自分の左目が妖しい紅色をしていたからだ。

「何…これ」

彼女はやつとの思いで声を発した。

何回まばたきをしても変わる事はなかった。

紅い瞳がギロリ、と自分を見ている。

その事に少しだけ鳥肌が立った。

紅く染まった目も、きちんと目の役割はしていた。

視力が衰えたわけではない。

彼女はとりあえず目を水で洗った。

しかし赤みが消える事はなかった。

観念した未来は洗面所から離れ、頭の整理を始めた。

彼女の側には、両親の部屋から出てきた箱が置いてある。

——私はその箱を開けた瞬間、何か黒いのが出てきて…。

そしたら視界がぐらぐらして……今なんだよね。

「あー全くわかんない！」

彼女がそう叫んだのと同時に、空腹を主張する音が鳴った。

時計は7時を指していた。

「…ご飯、作ろうかな」

そして彼女は立ち上がり、台所に向かった。

だいぶ時間が経ち、彼女の容態は良好になりつつあった。  
紅い目を除いては。

しかしまだ自由は目覚めない。

彼女はとりあえず2人分のご飯を作ったが、だんだんと心配になってきていた。

もしかして、私が意識を手放してた間、自由に何かあったのかな…？  
未来はそう思い、自由の側に歩み寄った。

彼からは規則正しい呼吸音が聞こえてくる。

「死んでは……ないみたい」

未来はそつと自由の腕を触り体温を確かめると、少し安堵した表情になった。

彼女が触れたのと同時に、自由がピクツと動いた。

彼女の冷たい手を感じ、意識が戻ったのだろう。

未来は自由の顔を覗き込んで見た。

自由はゆっくりと重い瞼を開けた。

そして彼女は安堵した表情から驚いた表情に変わるのだった。

「自由の目も……紅い」

夜の街中。

狭い路地裏。

影が自由自在に動いている。

その影にふいに銃弾が当たった。

影は痛みを訴えるようにもがき始めた。

そしてそれは銃弾を撃った主を襲い掛かった。

主はスーツを着た男で、銃を構えている。

「はぁ、闘うの好きじゃないんだけどなー」

男は容赦なく影に銃弾を放つ。

「でも、仕事だしね」

次第に影は力を失くし、小さくなっていった。

そして消えるのと同時に、影がいた場所から黒い珠が現れた。

男はそれを拾うと、スーツの内ポケットに隠した。

「お疲れ様」

路地の角に男に見えないよう隠れていた女が彼に話しかけた。

女はパーマのあたった目立つ茶髪で、服装はＴシャツにミニスカート姿である。

男はちらつと女を見ると、次に見る事はなかった。

「お前、いるんなら手伝えよ」

「あらヤダ。こんな格好で戦えと？もしかして、あたしのパンチラでも望んでたかしら？」

「ふざけんな」

男は低い声で言い放った。

女は悪戯な笑みを浮かべていた。

「だけど、貴方になら見せてあげてもいいのよ？」

「お前：麗音<sup>れお</sup>さんに似てきたな」

「え、だって麗音さん伝授だもん」

女は軽く男の肩を触った。

すると肩に乗っていた猫が女に威嚇した。

女は慌てて手を引っ込めた。

男は猫を褒める代わりに撫でていた。

猫はご主人の手に触られて、気持ち良さそうに丸まっていた。

「それじゃ、もう遅いし帰るわ」

「…次はちゃんとした格好しろよ。じゃあな」

「これがマイスタイルなんだけど…」

女は背を向けて歩いていく男に向かってそう呟いた。  
しばらくして女も路地裏を離れた。

自由は急いで洗面所へ向かった。

パチパチとまばたきをしたが、紅い目は変わらずそこにある。

自由は右目だけが紅く染まっていた。

「ど…どうしょ」

自由が鏡越しに映る自分と睨めっこをしていると、右目が突然普段の色に戻っていた。

その光景に未来も驚いた。

次第に未来の目も普段の色に戻りつつあった。

「何がどうなってるの？」

もう一度鏡で自分の目を確認すると、2人の目には先程の紅色は跡形もなく消えていた。

不思議な出来事ばかりで、自由の脳内は混乱状態だった。

2人は、事の始まりは『箱』だという事だけ理解していた。

「とりあえず…ご飯を食べたい」

自由が拍子抜けな発言をしたため、一気に未来は現実に戻された。

2人はご飯を食べると、普段の生活どおりの時間を過ごしていた。

「もしもし、F？」<sup>エラ</sup>

暗い部屋の中、白衣を着た男の声だけが響く。

隣には同じく白衣を着た女が紅茶を淹れている。

「どうやら、開いちやったみたいや」

男はゆっくりとした口ぶりで話した。

電話越しの声は小さく、女のもとには届いていない。

男は深刻な話にも関わらず、笑顔を見せている。

「…うん。そういう事でよろしく」

電話を切った後、男はくりと女のほうを向いた。

女は紅茶を飲んでゆったりしていた。

「さて。…今度は君の相手をしてあげる」

「要りません」

男は甘い口調で女を口説いた。

しかし女はきつぱりとそう言うつと、椅子から立ち上がり部屋を出ようとした。

だがそれは男に腕を掴まれ止められてしまった。

「…何ですか？」

「ホンマ、レオちゃんは相変わらず冷たいなあ」

「…それだけなら、私、行きますけど？」

女は軽く男の腕を振り払うとスタスタと早歩きをし、振り返る事もせず出て行った。

男は苦笑いを浮かべながら、再び椅子に座り直した。

そして数百枚とある資料に目を通しながら紅茶を飲んだ。

「…足立ツインズか…。ふつ、面白いなあ」

次の日、2人の所に訪問者が来た。

未来は眠たい目を擦りながら、ドアノブを押した。

「おはよー。あれ、まだ寝てたのかな？」

2人の前に現れたのは長身の男だった。

未来はその男の訪問で眠気が一気に覚めた。

「真守兄ちゃん！？どうして…？」

「テレビ見たかな？って思ったんだけど、まだ起きてなかったとは予想外だよ」

あらかわ まもる

荒川真守は、両親が早くして他界した2人の世話を見ていた幼馴染。長身で顔も女子受けする甘いマスクな為、高校時代からタレントとして芸能界活動もしている。

仕事で忙しいため、最近は2人に会う日が少なくなっていた。

彼は一礼をして未来たちの家へ上がりこんだ。

未来は彼の後ろを歩いていった。

「テレビ？もしかして真守兄ちゃん出てたとか？」

「うん、そのまさか。……自由、おはよう」

未来は真守の言葉に、慌ててテレビをつけた。

すると彼の言葉通り、彼がテレビの奥に映っていた。

しかし内容は意外すぎるもので、未来は目を大きく見開いた。

「え！？真守兄ちゃん、芸能界引退するの！？」

未来の叫び声に自由も反応した。

「何かあったんスか？」

2人は驚きを隠せないようだった。

その様子を見て、真守は少し苦笑混じりの懐かしむような笑みを浮かべた。

「……したい事が見つかったんだ。中途半端な気持ちで芸能界にいたくないし」

「真守兄ちゃんらしいね」

未来は真守の話にくこくと頷いていた。

自由は真守に紅茶を淹れると、彼の隣に腰をかけた。

真守はその紅茶を飲んだ瞬間、渋い顔をした。

「うわっ、何これ！？ねえ自由、お前何入れた？」

予想以上の反応に自由は慌てて彼の言葉に返す。

「え、紅茶の葉だけ……」

「他には？」

自由は記憶を蘇らせながら必死に考え込んだ。

「あ！砂糖入れた！」

「……塩、入ってる」

「えっ！？」

自由は真守からコップを奪うと、確認で飲んだ。  
が、彼もまた渋い顔をする事となった。

「しょっぱっ！ごめんなさい！！」

「ホント、自由は相変わらず、うっかり者だな」

真守は怒っている様子はなく、むしろ笑っていた。

未来は少し気分悪そうに自由を睨み付けた。

しかし真守から出た言葉は意外なものだった。

「じゃ、未来が淹れた紅茶飲もうかな」

「え、今すぐ淹れるね!？」

未来は反射的に立ち上がると、紅茶を淹れに行った。

その間、自由は何度も真守に謝罪をしていた。

「いいって。昔から自由はこうだから」

真守は優しく見守る兄のように微笑んだ。

そして真守は小さい声で話した。

「でも、あんまり未来に迷惑かけるなよ？」

「はい」

自由は素直に返事した。

すると未来が台所から戻って来た。

盆の中には3人分のコップが乗っている。

真守は盆からコップを取ると、即座に飲みだした。

「……うん、紅茶」

真守は未来に笑顔を見せた。

未来はその笑顔に頬を赤らめた。

「あ、ありがとう」

未来は真守から目を逸らすように俯いた。

自由は口直しに未来の淹れた紅茶を飲んだ。

しばらくゆつくりと時間を潰した後、真守は本題に移った。

「あ、それとね。引越すって聞いたから手伝いに来たんだよ。なんか昨日引越すつもりだったんだって？」

「あ……」

”昨日”と言われ、2人は一斉に昨日の出来事を思い出した。

昨日、あの事件は2人だけの秘密にすると約束したのだ。

こればかりは、幼馴染の真守でも言う事はできない。

未来は誤魔化すために言い訳をした。

「昨日もね、自由がこんなんで全然、進まなかったの」

未来の言い訳に、自由も口裏を合わせるため相槌を打った。

真守はその言い訳を素直に聞き入れた。

「そっか。じゃあ俺も手伝うよ。後どれくらい？」

本当のことを言うと、荷物は全部詰め終わっていた。

あの箱も別のダンボールに詰めていた。

「え、えつとね…全部詰め終わってるから、後は運ぶだけなの」

「そうなの？ よっしゃ、俺の出番だね」

真守は気合を入れて立ち上がった。

「よし、早速、運ぼうか」

そして2人は真守の協力を得て、無事に引越す事ができたのだった。

時刻は6時だったので、未来は真守に腕をふるい夕食を作った。

3人でご飯を食べるのは久々だったので、未来はとても幸せな気持ちだった。

その後、真守は仕事があるため2人に別れを告げた。

次、いつ会えるかわからない。

そう真守に言われ、未来は悲しい思いをしたが自由に励まされ、次にまた会えるとそう信じる事にした。

しかし次に真守に会うのは大分先の話だった。

## 2話：猫男と女と事件

例の箱の事件から一週間が経った。

あれから2人の目が紅くなる事は無かった。

身体に異変や異常も感じなかった。

自由はいつも通りジャージで過ごしていた。

未来も今日は外出する予定は無く、部屋着で過ごしていた。

「今日はあの日についての会議よ」

未来はソファに座ると、テーブルの上に紙とシャープペンを用意した。

自由は地べたに座ると、胡坐をかいた。

「うーん、わかる事って言ったら、あの箱は開けたらいけなかったって事くらい」

自由が発言した事を未来は紙に書いていく。

未来は箱が置いてあった場所を思い出した。

「あの箱はおそらく、お母さん達に関係してる」

未来はそう言いながら紙にさらさらと書いていった。

自由はその紙をまじまじと見つめた。

紙には次々と関連付けで書かれていた。

『あの箱と私たちの紅い目は関係している』

『紅い目はなぜ光る？』

など、答えが出ない事まで書かれていた。

ふと自由が謎めいた発言をした。

「真守兄ちゃんの芸能界引退と関係してる…？」

「それはないでしょ。それは偶然だって」

自由の推測は未来によって勘違いとされた。

会議から1時間が経過――。

結局、あの箱の正体がわからない限り、この会議は終わらないと知

った2人は昼食の準備を始めた。

2人の時の昼食は簡単なもので、スクランブルエッグにパンだった。飲み物は未来が淹れるミルクティーだった。

「そろそろ宿題始めないとね」

「……ホントだね。あー理科の自由研究とか無理ー」

「星座とかはどう？私、観測するつもりだし」

未来はスクランブルエッグが乗ったパンをかじりながらそう言った。

自由は理科の自由研究は毎年、未来に任せっぱなし。

去年は同じ文章で書いていたため、怒られたこともある。

それがあつたため、未来は今年に自由に見せるのを止めた。

「社会はー？」世界史の人物調べ”って書いてあるよ」

自由は”夏休みの宿題一覧表”を見ながらパンを食べていた。

未来も世界史はそこまで良くない。

自由ほど悪くはないが、人物に興味がないのだ。

「世界史で有名な人って誰がいる？」

「ペリーとかは？」

自由の口から出る人物の名前は、本当によく世に知られた人物の名前ばかりだった。

未来はある意味、自由のほうを知ってるのではないか、と思った。

夏休みの宿題の話をしていると、すでに昼食は食べ終わっており、時計は4時を指していた。

思わず話が盛り上がってしまった。

会議の事は2人の頭からは、すっかり抜け落ちていた。

未来は急いで昼食の後片付けをした。

「自由は、ダンボールを片付けといて」

実は、まだ引越しをしてダンボールが片付いていない状態だった。

それなのに2日後に隣子が遊びに来る。

会議などしている場合ではなくなった。

自由はダンボールをそれぞれの部屋に持って行った。

2人で使う共通の物はリビングに残しておいた。  
自由はそのまま自分の部屋に行くと、荷物をダンボールから出し始めていた。

未来も食器洗いを済ますと、部屋に入って行った。

自由より未来のほうが荷物は多かった。

未来は1つずつキレイに片付けていた。

その時。

突然の頭痛に襲われた。

”葛飾燐子が、危ない——”

彼女の頭の中で誰か女の人が呟いている。

ふと、机にセットしたばかりの鏡に目をやると、あの日のように紅く染まっていた。

未来は慌てて自由の部屋に向かった。

彼もまた同じ症状だった。

「何、これ……」

「燐子が危ないって！」

未来は頭の中で聞こえた言葉を自由に言った。

彼はそれを聞いて、目を丸くした。

”4丁目に、彼女がいる——”

今度は自由の頭の中から声がした。

声は男のものだった。

自由はそのまま未来に伝えた。

「4丁目に、燐子ちゃんがいる！」

2人の頭痛はだいぶ治まっていた。

今は頭痛よりも、燐子が心配だった。

それにあの声は、一体何だったのだろう。

未来は先程の現象が気になっていた。

自由は燐子のために、ただ走っていた。

4丁目に着いたが、それほど大きな事件はない。

燐子の姿もなかった。

「いない、よね」

未来は息を切らしながら、自由に確かめるように言った。

自由は息ひとつ切らしていなかった。

そしてゆっくりと奥に見えた薄暗い場所に足を進めた。

「え、自由。そっちに行くの？」

「何となく、こっちな気がする」

自由は勘が鋭い。

それは未来もよく知っていた。

だかた反論できなかった。

彼女は自由の後ろに隠れるように、付いて行った。

すると奥のほうから銃声が聞こえてきた。

自由は人がいる事がわかると走り出した。

「え、ちよつと自由!？」

未来も慌てて重い足を走らせた。

奥は広い空間だった。

人は3人いた。

1人は肩に猫を乗せた、茶色のスーツを着た茶髪の男。

もう1人は黒いワンピースに黒のブーツ姿の目立つ茶髪の長身の女。

そして最後の1人は、葛飾燐子だった。

「燐子ちゃん!？」

自由は急いで彼女の元へ向かった。

しかしスーツを着た男が、彼の手を掴んだ。

「危ないから、こっちに――」

男と自由が目が合った瞬間、男は言葉を失った。

自由は紅い目を見開いて、訴えるように男を見た。

「彼女は、俺達の友達なんです!」

後ろにいた女も彼の目を見て呆気にとられていた。

自由の後ろから現れた未来を見ても、2人の反応は変わらずだった。

男の動きが止まった隙を見て、自由は男の手を振り払った。振り返り燐子を見ると、彼女の周りには影が付き纏っていた。あの影に彼は見覚えがあった。

あの日、あの箱を開けた時に現れた影と同じ――。すると影はこちらを向いた。

そのまま自由み襲い掛かった。

「危ない！」

男は彼を庇うためにこちらに引き寄せた。

そして女は太股から暗器を取り出して、影に向かって投げ放った。影は暗器に直撃すると、姿を現した。

その姿は鬼に似ていて、角が生えていた。

「実体を現したわね」

女はそう言つと、暗器を構えた。

男は自由の下敷きになっていた。

「あ、すいませんっ」

「大丈夫？ここから動かないで」

男はそう言つと、女と鬼が戦う場所へ向かった。

自由の許には未来が走ってきていた。

男はスーツの内ポケットから銃を取り出した。

女は暗器を投げると、一気に鬼との距離を縮めた。

しかしそれはフェイクで、その後ろで男が銃弾を放った。

女は鬼のすぐ後ろにいる燐子を救うと、自由たちの所へ届けた。

「はい。怪我はしていないから安心してちょうだい。ビックリしちゃって意識を飛ばしたただけだから」

未来は眠っている燐子の手を握った。

自由は未来にもたれかかりながら、燐子を見つめていた。

しかし戦いはまだ終わってはいなかった。

鈍い音が響き、男のほうを見ると、彼は頭から血を流し倒れていた。女は慌てて男の所へ走っていった。

男は必死になりながら立ち上がった。

「浩史！無茶はしちゃダメ！」

女は”浩史”と呼んだ男の前に立った。

そして暗器を構えると、一気に鬼に投げた。

暗器の1つが鬼の心臓を貫き、鬼はそのまま影になり消えた。

影から現れた黒い珠を女は拾うと、男のスーツの内ポケットに入れた。

「慣れない仕事をするからよ。闘い専門はあたしなんだから」

「うつさい！お前、血がつくから嫌とか言ってただろ！」

「うん、それは嫌」

2人の許に、未来と燐子を抱えた自由が来た。

未来は興味津々に2人を見た。

「お2人は、恋人同士ですか？」

その言葉に男が即否定した。

「違う！こんな奴なんて嫌だ」

「ひどっ！さっき助けてあげたのにー」

こんな事をしていたが、男の怪我は重傷だった。

頭からの出血はなかなか止まらない。

未来はとある提案をした。

「あの、私の家近いんで、来ますか？」

「いいのかしら？嬉しいわぁ」

女はそう言くと、半気絶中の男をひょいと身軽に抱えた。

男のスーツの中から猫が現れた。

猫は起用に男の頭に乗ると、怪我をした部分を撫でていた。

そのまま猫は女の肩に乗った。

「嫌だ、血がつくじゃない！」

女は悲鳴を上げながら、猫と戦っていた。

部屋に戻ると、自由は未来の部屋で燐子を寝かせた。

燐子はただ眠っているだけだった。

自由はそつと燐子の髪を触った。

さらさらしていて、まるで砂のようだった。

自由は彼女の耳元で「ごめん」と謝ると部屋を出た。

ソファでは男が治療を受けていた。

女がする手当てはかなり雑だった。

「痛いって！もつと優しくしろよ！」

「男なら、これくらい慣れなきゃダメよ」

女は豪快だった。

手当てが終わると同時に未来はお茶をテーブルに置いた。

女は血がついたため、手を洗いに洗面台へ向かった。

男は頭に包帯を巻くと、未来が淹れたお茶を飲んだ。

「自己紹介、まだだったな。俺は豊島浩史<sup>とよしま ひろし</sup>」

「あたしはダイヤよ」

洗面台から戻って来た女も自己紹介をした。

未来と自由も自己紹介をした。

ダイヤは未来の事が気に入ったみたいだ。

「未来ちゃんって呼んでもいい？可愛いわね」

「あ、ありがとうございます」

浩史は不機嫌そうに、ダイヤに叱った。

「あんま触るな。お前の変態がうつる」

「ちよつとそれ、どういう意味よ！」

ダイヤは浩史に反論すると、彼の代わりに猫がしゃーっと怒った。

未来は先程の事件について聞いた。

浩史の話によると、力が強い妖怪ほど鬼の姿に近くなり、弱いほど

影になるらしい。

今回の鬼に近い姿だったから力は強かったらしい。

その鬼が出没する原因となったのは、あの例の箱だった。

あの箱には、これらの鬼を閉じ込めていたようだ。

当時、鬼退治をしていたのが、彼らの両親だったそうだ。

しかし鬼と相打ちになり、鬼は箱に封じたものの鬼の力が強すぎた

ため、両親は自らの命を鍵としたらしい。

ようやく箱の正体がわかり、2人は理解できた。

「今度は君たちが退治する番」

浩史はそう言っていると、2人の目を見た。

「君たちの目には、両親の力が宿っている」

「お母さん、お父さん……」

「だから、事件も教えてくれる」

あの時の頭の中の声は両親のものだと、2人はようやく理解した。未来はそう思うと涙が溢れてきた。

「これを集めれば、この世は平和になるわ」

ダイヤはそう言って、黒い珠を2人に見せた。

この珠は鬼の魂だとダイヤは言った。

それをまた箱に戻していけば、また元に戻る。

「それと、君たちは呪文を知っているはず」

浩史はそう言ったが、2人は全く知らなかった。

彼は2人のきょんとした表情に驚いたが、おそらく時間が経てば思い出すらしい。

その呪文は鬼の力を封じる事ができるという。

不安そうな顔をする2人に、浩史は優しい態度を取る事はしなかった。

「君たちが開けたんだ。他人事と思うな」

彼はそう言い放つと、ソファで寝転んだ。

どうやら怪我が痛むらしい。

「もう夜だし……自分たちの事をしててもいいわよ」

「とりあえず、夕食作ります」

未来はそう言って立ち上がった。

自由も「手伝う」と未来の後を付いて行った。

浩史はそのまま目を閉じて眠りに着いた。

ダイヤはテーブルに置かれたお茶を飲んで、一服していた。

夕食が出来ると、ダイヤは浩史を起こした。

浩史は寝起きが悪いらしく、かなり不機嫌だった。

隣にいた猫は、相当ダイヤの事が嫌いみたいで、浩史に触る事を怒った。

自由は未来の部屋に行つて燐子の様子を伺った。

彼女はまだ目を覚ましていなかった。

「彼女は明日くらいに目覚めるから」

ふと後ろから声が聞こえ、自由は振り返った。

未来の部屋の前に立っていたのは浩史だった。

「浩史さん……」

「ごめん、トイレどこ？」

「あ、案内します」

自由は立ち上がり未来の部屋を出ると、浩史にトイレの場所を案内した。

夕食は客人もいるため少し豪華だった。

主食はカレーだが、おかずにたくさん調理していた。

ダイヤはつまみ食いで食べていた。

「未来ちゃん、お料理得意なのね」

「いえ、そこそこです」

「モテるでしょ？」

「全然モテませんよー」

何故かダイヤと未来は女子話で盛り上がっていた。

そこに男2人がやって来ると、4人は夕食を食べ始めた。

浩史はカレーが好物だった。

なので何杯もおかわりをしていた。

「ちよつと浩史、一応人の家なんだから」

「ん、わかつてるよ」

浩史はそう言いながらもカレーを注いでいた。

「いいですよ、2人では食べきれないんで」

未来は遠慮しない浩史にそう言った。

浩史の横では猫がミルクを飲んでいた。

「この猫はオスですか？」

「メス。名前は”ミー”」

自由は猫の名前を呼んだ。

するとミーは自由に擦り寄っていった。

「基本は懐くから。あいつ以外」

浩史はそう言っただイヤを見た。

ダイヤは楽しそうに未来と会話をしていた。

夕食が終わると、未来は後片付けを始めた。

その間に自由はお風呂に入りに行った。

ダイヤと浩史はリビングでゆっくりしていた。

「お前、次会う時はちゃんとした格好しろって言ったのに」

「だから、これがちゃんとした服よ！」

2人きりになると、また言い争いが始まっていた。

未来はキッチンからその様子を伺っていた。

「だったらもつと行儀よく座れ。はしたない」

「しょうがないでしょー」

ダイヤは頬を膨らませた。

そして胡坐を解き、正座に座り直した。

浩史は頭が痛むのか、何度も頭を押さえていた。

それに気付いたダイヤは浩史の顔を見つめた。

「…何？」

「痛いんだったら、横になっただろうよ？」

浩史は素直にダイヤの話を聞き入った。

彼はソファの上で横になると、眠気が襲い始めた。

ダイヤは彼の寝るソファに寄りかかると、そのまま目を閉じた。

浩史はダイヤが眠るのを確認すると、キッチンにいた未来を呼んだ。

「…膝掛けとかある？」

「あ、持ってきます」

未来は小さい声で答えると、ダイヤを起こさないように膝掛けを探した。

それを浩史に渡すと、彼は丁寧にダイヤの膝にかけた。

「こんなに足出しやがって。夏だけど夜は冷えるからな」

未来は浩史の分の毛布も用意していた。

浩史は一瞬驚いたが、すぐ優しい微笑みに変わった。

「気が利くね。ありがとう」

浩史はそう礼を言うと、毛布を自身にかけ眠りについた。

未来はその後、お風呂場に向かった。

自由はすでに部屋に戻って寝る準備をしていた。

彼女の部屋には燐子が眠っている。

そのため未来も今日はリビングで一夜を過ごした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4144q/>

---

パンドラの希望

2011年1月28日01時26分発行